

元気

まち物語

2014.3



下関市民ミュージカルの会

皆さんはミュージカルと聞いて、何を想像しますか。芝居、歌、ダンスがそれぞれ独立したものでなく、すべてが融合したものがミュージカルです。今回は厳しい練習をして、「本物」を子どもたちに伝え続けている「下関市民ミュージカルの会」の皆さんを紹介します。

地方から素晴らしいものを発信していきましょう！

1989年、下関市制100周年を迎える時、子どもたちに何かを残そうという話になりました。伊藤さんは「形を作るのではなく、心に残すべきだ」と思っていたそうです。そんな時、かつて劇団四季に所属していた伊藤さんを、四季の女性スタッフが訪ねて来ました。「下関市の子どもたちを無料招待できる公演があります」と言ってきたそうです。ぜひ実現したいと

思ったのですが、公演資金が集まらず公演は実現しませんでした。その悔しい思いから、「ならば自分でつくるしかない」とたった一人で設立したのが「下関市民ミュージカルの会」です。募集が集まったキャスト希望の人たちと一緒に、立ち方、歩き方、呼吸の仕方まで全てのトレーニングを始めました。地方から本物を発信していくことを目標に情熱を燃やしてきました。

表現したい人なら誰でも

オーディションは行わないそうです。「やりたいという熱い思いのある人は、年齢や経験は関係なくみな舞台に出ます。表現して、何かを伝えたい気持ちがあれば誰でもできること。場所さえ与えられれば誰でもできるのです。現在のメンバーも家庭を持ち、職業を持ち、学校に通う市民です。自分で表現して何かを伝えたいと思う市民の集まりです」と伊藤さん。門戸は誰にでも開かれているのです。

子どもたちに本物を伝えよう

子どもたちに本物を見せたいという気持ちから始めたミュージカ

ルは、今まで学校巡回公演を市内外72校の小中学校で行ってきました。「学校が週休二日制になり、仕事や学業を抱えているため、平日の上演希望になかなか応えられないのが現状です。もっと子どもたちに伝えたいです」とメンバーの皆さんは必死に自分を表現して何かを伝えようと稽古をしています。「稽古を離ればそれぞれが自分の生活に戻ります。生活の中でこの経験を生かしていける人生を過ごしてもらいたいです。少しでも下関の文化活力に良い影響を与え、同時に子どもたちの心の中に残るものをつくってあげたいと思います」と伊藤さんは熱い思いを語ってくれました。

本物を伝えることが長く続く理由であり、支持してもらえる理由なのです。

- ①2010年創立20周年記念公演「天使たちの鎮魂歌」
- ②創立25周年記念公演「初めてのLove Letter」に向けて練習中のメンバー
- ③厳しい眼差しで稽古を見つめる伊藤寿真男代表
- ④真剣な表情のメンバー
- ⑤表情豊かなメンバー

